

# 会長講演

## 当事者とともに創る看護の知

城丸 瑞恵

札幌医科大学 保健医療学部 看護学科 教授

座長：泊 祐子（関西福祉大学大学院 看護学研究科 教授）

## 当事者とともに創る看護の知

城丸 瑞恵

札幌医科大学 保健医療学部 看護学科 教授

医療技術の進歩や少子化・超高齢社会、直近では新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対応など看護を取り巻く環境は常に変化しています。また看護系大学の増加や高い専門性と優れた看護実践能力をもつ高度実践看護師の育成など質的量的な拡充が求められています。このような状況の中で、あらためて看護の知の意味や創造について考えてみました。

看護は「広義には人々の生活の中で営まれるケア，すなわち家庭や近隣における乳幼児，高齢者や虚弱児への世話等を含む…略…狭義には，保健師助産師看護師法に定められるところに則り，免許交付を受けた看護職による，保健医療福祉の様々な場で行われる実践」（日本看護協会編，2016）とされています。このケアの意味については，いろいろな解釈・説明があると思います。その中で，私は医療人類学者である Arthur Kleinman（2015）による「ケアを語る時，得てしてケアを受ける側のことやそのプロセスのことが忘れがちですが，ケアを受ける側のプロセスやケアをする側との相互性も視野に入れる必要」があるとの言葉が心に残っています。看護は看護をする対象の存在があって成り立ちます。ケアの受け手の当事者である患者・家族の体験を理解すること，看護職への患者の期待を察知すること，患者に寄り添いともに考えることが，看護の基本だと思います。また，患者・家族の声に真摯に向き合い，患者・家族と看護職の相互性の中で実践的な看護の知が創られると考えます。これらのことは，先ほどの Kleinman の言葉に触発され共鳴して，あらためて感じるところです。

仲間たちと“乳がん・婦人科がんの患者会”を定期的で開催しています。この患者会の参加者の中には，手術後リンパ浮腫が生じて弾性着衣を装着されている方がいらっしゃいます。患者会の際に，「スリーブをつけているとあせもで大変」「きついから手が痛くなる」などの声が聞かれ，治療に必要な弾性着衣が新たな苦痛をもたらしていることがわかりました。そこで，当事者である患者の語りを得るとともに当事者とともに弾性着衣装着方法に関する検証を行うことを始めました。この結果を分析して安楽な弾性着衣装着方法の構築を目指しています。このような活動をご紹介しながら，当事者との相互性の中で，当事者にとって活用できる看護の知の創造の意味・展望について考えてみたいと思います。